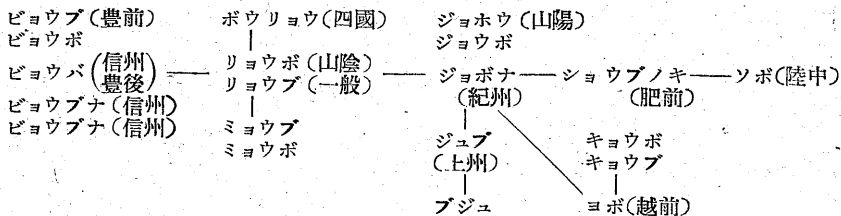


えた色をしていてこれで出来上つたのである。念を入れるならこゝで今一度日にやけた熱いのには 2 時間もはさんでおくなら申分はない。

○リョウブの語源はソバノキか? (前川文夫) (Fumio MAEKAWA: Etymological consideration on the Japanese name of *Clethra barbinervis*.)

リョウブには系統の違う名が少くとも三つある。ハタツモリ、サルナメシ、リョウブの三つである。第一は牧野先生が「旗積り」であることを確められた。これは花の形容に基ずいている。第二は「猿滑し」でサルダメシとも轉訛しているが、これは樹幹の形容から來ている。この木の皮は少し太くなると丁度サルスベリ(百合紅)の様に剥げて來て、あとは黄褐色を帯びた膚が滑らかで猿がすべるという表現がふさはしい。⁸ 恐らく上等の薪炭を焼き又くり物を引く材として注目したもので、冬木立の時の利用が着目の動機であろう。ヒメジャラにもサルスベリ、サルナメリの方言があるのと同巧異曲である。この兩名稱ともに少くとも言葉の上では全く別の概念たとへばハタなりサルなりを借用してその行動を示す言葉とを前後結びつけて木の名としたものであつて、共に古い名ではあるが最も古形の命名法ではなく、かなり自由な餘裕のある命名態度がとれる様になつた時代——多分平安前期の前後であろう——の産物であろうと思われる。

残る一つのリョウブについては、この名が今は表だつた學問的な名に採用されてはいるが、語源がわからないといわれている。この頃牧野先生の牧野植物隨筆: 27—28 を讀み、又農商務省山林局發行の日本樹木名方言集: 290 を繰りてみて一つの手掛りかと思ふものをえたのである。それはリョウブに連絡を有するかと思はれる方言が幾通りもあつて中々變化に富んでいることであつた。試みにそれらを類似の程度で並べてみたが下の如くになつた。



明らかに二つの音節から成立つていて語根は B 列である。ところどころにナ字があるのは若芽を食用にするためにつけた名であるからこれは別問題である。語幹の方は Byô-Ryô(Myô)-Jô(Yô)-Syô(Kyô)-So となつている。この音韻變化はかなり廣い範圍であると共に變化が甚だしいが同一物を指している點と語根が共通である點とで、一つの系列上の變化として受取つてよいと考える。ところで注意を要することはこれだけではこの變化の向きが別に決らない。左向きとも右向きともいずれともとれるのであるが、右端の二段が陸中と肥前との方言であるところに意味がありそうなのである。言葉が中

中央に發生して文化と共に四邊に流れて行くに従い次第に遠方に比較的變形を受けずに到達する。その頃には中央にはもう別の名が（同一系統のこともあれば別系統のこともある。この場合は同一系統に屬する）出現して又前の名を追つて擴がつて行こうとしている。こんな場合には前者は後者に對し方言の位置を押しつけられてしまう。方言が古型を存する可能性があるのはこゝである。陸中と肥前とはこゝに扱つた資料に關しては最も末端で、しかも全く相反する方向にある地方である。信州と豊前、豊後との間よりはずつと遠い。そこで恐らく今知られている名の内ではショウブノキとソボとが最も原型を存するものであらう。この So 又は Syô からやがて Byô や Ryô や Jô が音の轉訛として發生したものであつて、従つて So や Syô より中央に近いところに分布しているのであると思われる。さてこんどはショウブノキとソバとが何を意味して付けられただらうかは今のところ證明がない。ショウブを菖蒲とすべき香氣はない。たゞ一つの可能性はソボがソバ即ち蕎麥から來たのではないかという推定が残る。ハタツモリを生じさせたあの花序に密集した小白花の群は樹上に群がるソバの花の聯想ではなからうか。はたしてそうだとするとこの名はソバムギ(稜+麥)を第一段階として出發したソバが第一次省略によつてソバとなり、ついでこの省略されたソバが第二段階の起點となつて出來たソバノキの第三例であることになる。第一は食用果實としてのソバに因むブナに對するソバノキであり、第二は花序の白色と形狀とに注目したソバに因むカナメモチに對するソバノキである。そしてこの同じく花容に因んでリョウブに對して與へられたソバノキが其の第三番目である。發生はブナのソバノキが最も古く、第二と第三とはそれよりは新らしいと思はれる。

○南伊豆の羊齒類 (倉田 悟) (Satoru KURATA: Noteworthy ferns from the southern part of Izu Peninsula.)

天城山を中心とした伊豆半島は羊齒類の好採集地として有名であるが、從來餘り採集家の出入りしなかつた賀茂郡の中、南天城國有林並びに其の附近、及び東京大學樹藝研究所用地の所在する南土村に於ける、東京大學農學部林學科植物學教室の職員・學生による最近の採集品の申から、著しい羊齒と其の産地を次に報告する。(學名の後の漢字は村名である)。

1. ヒノキシダ *Asplenium prolongatum* Hook. (仁科, 城東)
2. ホウビシダ *Asplenium unilaterale* Lam. (仁科, 上河津, 城東)
3. クルマシダ *Asplenium Wrightii* Eat. (仁科)
4. ミドリワラビ *Athyrium viridifrons* Makino (上河津)
5. イハヒトデ *Colysis elliptica* Ching (仁科, 南上)
6. ホホノカハシダ *Ctenitis shikokiana* H. Itô (仁科)
7. カツモウキノデ *Ctenitis subglandulosa* Ching (南上)
8. ミヤマノコギリシダ *Diplazium Mettenianum* C. Chr. (仁科, 南上)
9. コクモウクジャク *Diplazium virescens* Kunze (上河津)